

意見陳述者 提出資料

①これまで独自に検証を進められてこられた児童ご遺族 (資料到着順)

佐藤みずほさん (当時6年) ご遺族	佐藤 敏郎 様
只野未捺さん (同 3年) ご遺族	只野 英昭 様
今野大輔くん (同 6年) ご遺族	今野ひとみ 様

検証委員会の皆様へ

2013. 3. 18 佐藤 敏郎 (6年佐藤みずほ父)

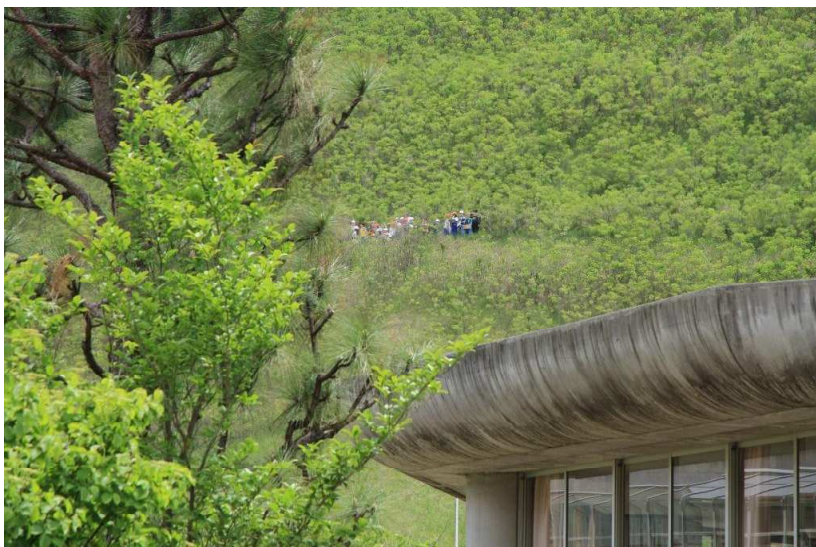
学校管理下にいた9割以上の子ども、先生が犠牲になったという事実から目を背けないでください。津波の情報が飛び交う寒空の下、校庭でじっと指示を待っていた子ども達から、避難を始めた途端、巨大な黒い波に飲まれた子ども達から、目を背けないでください。家族、地域が見守り、育ててきた大事な大事な子ども達の命の話をしてください。



なぜこのような状況になったのか

- ①避難できる条件（時間・情報・手段）は十分に揃っていたにもかかわらず、移動した時間と距離はわずか（約1分間、180mほど）である。
- ②目指したルートは、三角地帯へ向かうには狭く、行き止まりである。そもそも、三角地帯は川のそばである。

そこに至った要因について、多くの資料、証言をもとに2年間考察を続けてきました。



低学年も登っていた。

この位置までは波は来ていない（2010.6月撮影）



体育館のすぐ裏手の山

椎茸栽培などで日常的に登っていた。
傾斜は緩やか。（河北新報より）

【3. 1 1 の状況について】

14:46 地震発生

- ↑
51
分
間
↓
- 14:49 大津波警報発令
 - 14:52 防災無線サイレンが鳴り、6 mの大津波警報
(児童は防災無線を校庭に出て間もなく聞いている。
(ラジオも再三大津波警報を伝え、避難を呼びかけている)
 - 15:00 前後、迎えに来た保護者がラジオの内容を告げ、必ず山へ逃げるよう進言)
 - 15:25 広報車が避難を呼びかけ通過

15:37 大川小に津波到達

あの日の大川小学校で、先生達は子ども達を守ろうと一生懸命だったし、避難の必要性も感じていました。単に危機意識が足りなかったということではありません。避難行動の足かせとなったものがあります。

【事後対応について】

移動時間が1分程度だったこと、子どもが山への避難を進言したこと、たき火をしようとしていたこと等、重要な事実を市教委は早い段階で把握したにも関わらず、追及を受けるまで明らかにしません。あるいは、追及されても曖昧にしています。隠蔽、ねつ造と言われても仕方がない対応です。残念で仕方ありません。2つだけ述べます。

平成23年6月4日の説明会の方針

- ①「1時間程度で終了」と断ってから開始。十分な説明がなされず、遺族からの質問を途中で打ち切り、退室した。報道には「遺族は納得」と答え、説明会はもう行わないと明言。この方針を全員が共有してから、説明会に臨んでいる。
- ②すべて聞き取り調査をもとにして作ったという説明を読み上げたが、聞き取り調査報告書に記載のない内容が複数ある。聞き取りの際のメモは廃棄したという。
- ③5月に行われた児童への聞き取り調査はたいへん杜撰なものである上、せっかく一生懸命話してくれた内容が反映されていない部分が少なくない。

平成23年6月3日に届いた保護者宛のA教諭からの手紙 (FAX) の扱い

- ①6月4日の説明会で公表しなかった。説明会は打ち切りと考えていたので、永久に表に出さないうつもりでいた。市教委内でもごく一部しか知らされず、教育長にさえ12月まで隠していた。
- ②FAXを、いつ誰が受け取ったか、どのように教育委員会に提出されたのか明確に説明できず。

以上は、ごく一部の例です。市教委の先生方一人一人は、これまでの対応について「おかしい」と感じています。しかし、それを誰も口にすることなく、言い訳に終始しなければならない構造になっています。

事後対応について検証することは、当日の避難行動の検証とも無関係ではありません。大いに問題視すべきです。

大川小の検証は、検証委員、遺族、教育委員会、誰にとっても辛く、難しい作業です。関心をもっていただいている多くの皆さんも、報道の皆さんも、この重い事実に向き合うべきなのか、悩み、苦しみがらきた2年間です。仕方がなかったで終わらせてはいけません。このようなことは決してあってはならないのです。どうぞよろしく願いいたします。

大川小学校事故検証委員会に対する要望及び気持ち

平成 25 年 3 月 21 日

遺族 只野 英昭

○ 大川小学校事故検証委員会への要望として自分の気持ちを述べさせていただきます。

・東日本大震災において、私は 3 人の家族を津波で亡くし、自宅も全て流出しました。川の船を養生しに行ったと思われる父、子供たちを一度は迎えに大川小学校に行き忘れ物を取りに行った妻、そして、大川小学校で津波にのまれた長女……辛うじて、長男は津波にのまれても生き残っていてくれました。

・あの日のあの時間私は、会社で被災しました。約 3 分にも及ぶ揺れで体験した事のない凄まじい地震でした。自宅が心配で一所懸命携帯電話や自宅の電話に電話するも繋がる事がなく、伝言ダイヤルにメッセージを送り会社の直ぐ近くの山に津波を想定して避難を開始しました。途中何度も電話するも不通のまま…避難した山では携帯電話のワンセグ放送が見る事が出来たので、津波の情報を入手して避難できました。

・3 月 13 日やっとの事で、市内から友人の自転車を借りて自宅に向かう事が出来ました。途中で地元の先輩に会い、間垣(小学校手前の地区)の堤防が決壊して大川小学校には行く事が出来ない事を知らされ、大川地区の人たちは避難所に指定されている体育館「ビッグバン」に避難しているのを知り避難所へ向かいました。現地に着くと地元の釜谷地区の父兄が玄関先で泣き崩れながら『ダメだ……学校逃げていなかった……』と聞かされ、1 人になったと思いました。けれども『息子が怪我したけれど……』と知らされ、2 階の和室に横たわっていた息子と母にやっと会う事が出来ました。息子の前で初めて泣きました。『生きてくれて、ありがとう!』と言って……

・震災時、私は釜谷地区の消防団の班長だったので、次の日からの捜索に向けて息子から、当時の避難状況を直ぐに聞き始めました。辛かったかもしれませんが……目を怪我したとはいえ、耳ははっきりと助ける人の声を聴いていた筈です。でも、津波に襲われた状況が分からないと捜索するにもどこから探すか当時は全くわかりませんでした。現場での生き残った当事者でなければ当時の避難行動を知る手段はなく、息子が頼りでした。

- ・石巻市の教育委員会は生き残った子供たちに対して聞き取りを行いました。実際に乱暴で、私の承諾も得ずに息子聞き取りを行いました。息子が話した事、聞かれた事、問題になっている子供たちが山に逃げようと先生に訴えた言葉ですら、無かった事にされ、息子は指導主事の先生に確かに『6年生の男の子が山に逃げようって言った様だけれど、それって本当?』と言う質問に息子は『はい!』と答えた筈だと言っているのに、市の説明会では自分の目の前で『知らない…』挙句の果てには、『子供の記憶は変わるものですから…』と話す指導主事。この様な事を遺族の前で平然と発言される方が小学校の校長先生をしていること事態が震災前の教育委員会と何ひとつ変わっていないと思いました。
- ・息子は今までたくさん証言してきました…家族を亡くし、友達を亡くし、自宅も故郷も無くしたこどもが一生懸命証言してきたにもかかわらず、大人の対応、しかも学校・教育委員会が事前、当時、事後…全てにおいてこの様な対応を取り続けているのを未だに見せ続けていることそのものがあってはならないと考えるのは私だけでしょうか?
- ・昨年の8月21日の現場検証においても、当事者がだれひとりいないのに現場検証をしていました。自分は大人がこの大川小学校の事故に対して真剣に取り組んでいる姿を見せたいが為に、息子も連れて行き車の中で現場検証の様子を見せて避難経路についても確認の連絡をしながら参加していました。
- ・唯一生き残った先生については、これだけの犠牲者が出たのに、嘘の証言を重ねている事がこどもを亡くした親に更に辛い思いを掛け続けているのを知って貰いたいです。
- ・遺族がこの検証を公開にして欲しいと言いつけているのは、1回目と2回目の説明会でマスコミを入れずに公開しませんでした。その結果、後の記者会見で「遺族は納得しました…」という自分達に都合の良い嘘の報告をマスコミのインタビューに平然と応えている事実があったからに他なりません。

○体験した事のない事故が起きたのにもかかわらず、普通の対応でごまかそうとしたり、教育者でありながら、こどもたちの失われた尊い命と向き合おうとせず、虚言暴言・隠ぺい工作をして保身に走っている事が許せないのです。もう二度と大川小学校の悲劇は起こさないでほしいのです!

亡くなった児童・家族・先生が生きた証の為に…

生き残ったこどもたちの為に… 1000年後のこどもたちを守るために…

検証委員の皆様へ

今野 ひとみ（6年 今野大輔 母）

あの日、私は、家、地域、そして5人の家族を失いました。でも、家で亡くなった4人と、学校管理下で亡くなった息子は違います。息子だけは助かっていると思っていたいました。

小学校の卒業式を目の前に、中学の学生服を着ることもなく、突然、自分の前からいなくなってしまった息子。周りを見渡せば成長した子ども達、学生服を着た子ども達が笑顔で暮らしているのに、何故自分の子がないんだろうと、未だに現実を受けとめられずにいます。自分の中では、あの日3. 11から時間が止まったままです。優しかった息子、頼りがいがあったあの背中、もう二度と見る事が出来ません。

「おっかあ、心配すんな」と、たまに声が聞こえてくる様な気がするけど、何故自分よりも先立たなくてはいけないのか、まだ納得が出来ません。

息子たちは6年生だったので、周囲の様子や情報から、自分が置かれている状況を把握し、早くから「山へ逃げたい」と先生に訴えていたと、生存している息子の同級生から聞きました。子ども達は人間の本能で、逃げるべき、高い所に上がるべきだということを十分知っていたのです。

このままでは、自分が死ぬと判っていながら、寒い寒い雪の降る校庭で50分の時間を過ごしていた時の恐怖…。代われるものなら代わってやりたかったと、今も泣いている日々です。

失った命はもう二度と帰ってくることはありません。でも、最後まで自分の命を守りたかった息子の無念は未だに残っています。

今、生きている大人の都合で、事実を歪めることがあってはならないと思います。犠牲になった74人の子ども達、10人の先生方の魂と向き合い、事実をすべて明らかにして、正しい検証をお願いします。それが供養にもなると思っています。

どうか宜しくをお願いします。